

「瞳の先の貴方へ」

一年・ノベル&シナリオ専攻

熊谷夢奈

十九枚

昼休みを告げるチャイムを聞きながら階段を駆け上がる。邪魔に感じた髪を一つに結びながら、足は止めない。

「立花ちゃん今日も屋上？」

「うん！」

すれ違いざまに声をかけてくる友達には申し訳ないが、目的地へ急ぐ。目的地はどこかに逃げるわけでもない。それでも、一刻も早く行きたくて仕方がなかった。理由は単純。そこに私の会いたい人がいるからだ。

一年生の教室がある二階からその上の三階、四階にあたる屋上。階数が上がるにつれ、心臓がバクバクと高鳴る。息切れだけではないその感覚が好きだ。

屋上への扉の前。しっかりと呼吸を整えて、重い扉を力任せに押した。視覚いっぱい広がる五月を通り越して夏のような眩しい青空。その中に長身の男子生徒がポツンと立っている。

「笹木先輩！」

「あ、立花さん」

夏日にも関わらずしっかりと学ランを着込んだこの人は、笹木怜雄先輩。私の憧れでもあり大好きでもある人だ。

「また授業サボってたんですか？」

「まあね」

満更でもない顔でフェンスに寄りかかっている先輩の隣に、私も同じように寄りかかる。別になにかする訳でもない。こうやってただ二人きりで屋上で話すだけの幸せな時間。

風が吹いて柑橘系のさわやかな香りが鼻を抜ける。私の好きな匂いの一つ、先輩の香水の匂いだった。

「最近暑いね」

そう言って先輩は栗色の前髪をかき分ける。目にかかっていたものがなくなると、先輩の整った横顔がはっきりと見える。男の人に感じるのは少し変な話かもしれないが、先輩は綺麗だと思う。同時に脆くて儂い。それは先輩本人だけではない。先輩が書いた数々の作品にも表れている。文章を書く者としても、人間としても。私には到底届くような存在ではなく、まるで雲の上の人。

「立花さん……？」

私の顔を覗き込んだ先輩の真っ黒な瞳が、私のものとバッチリ合う。一瞬息が止まって、ドキリと心臓がはねた。

「あっ、あつい……ですね！」

私はすぐに視線を逸らして誤魔化した。先輩は「俺、皮膚弱くて半袖着れないから嫌になっちゃうわ」と腕を捲っていた。気づく様子はなさそうだ。

「そういえば、なんで先輩はいつもここにいるんですか？」

「思い出の場所だからかなあ」

そう言って複雑そうな笑みを浮かべる先輩の真っ黒の瞳は、私を映していないのだ。あの目に映るのは私ではなく、先輩が一年生のころに出会ったという思い出の人。

「またあの先輩の話ですか？」

「そうなっちゃうね」

遠くを見ている先輩に「あの先輩じゃなくて私を見てくださいよ」なんて言えなかった。

私はあの先輩になりたい。

先輩の真っ黒の瞳の中に、少しでも映りたいのだ。

「なあ立花、今日暇か？」

「何よコウ、また女除けしろって？」

放課後の教室、帰る用意をしていた私のもとへやってきた男子がいた。

コウこと川口康貴^{かわぐちこうき}。小学校から同じ学校で、クラスも同じになることも多い。おまけに家も

近くて親同士も仲がいい。いわゆる幼馴染というやつ。

清潔感を漂わせる黒髪短髪でサッカー部。いかにも好青年という要素だらけのコウは、年齢性別問わずの人気者だ。特に女子から絶大な人気を誇っているらしく、私はこうして女除けに使われることもしばしば。

そんな幼馴染は、高校生になってからというもののこうして無駄に絡んでくるようになった。窓際の列の一番前というコウの席に対して、私の席はドア側の一番後ろだというのに。今日もまたご苦労なものだ。

「違うっての。別に女除けのために誘ってるわけじゃねえし」

ぶっきらぼうに言い放つコウは、人気者のかけらもない。家族同然の私の前ではこんな態度だ。よく周りの友達から羨ましがられるが、ずっと一緒に居すぎて何がいか理解できずに適当な返事で済ませている。こっちの身にもなって欲しい。

「てかお前何回言ったら分かんだよ」

「じゃあなんで私なのよ」

私以外にも仲のいい人間はたくさんいるはずなのに。そういった意味で聞いたのに、コウは黙ってしまった。別に難しい質問をしたわけでもないのに。しかも、毎回この言葉の先が出な

い。長年の付き合いにあやかっって言っつてしまえばいいものを。何を躊躇っているのだろう。

「それはな……」

「立花さん」

やっと口を開いたコウの言葉を遮ったのは、私を呼ぶ声と風に乗って香る柑橘系。

私とコウの斜め後ろ。開けっ放しになっていたドアの柱に、もたれかかっている先輩がいた。

「先輩！」

人がまばらになった教室内に喜びの声が響いて、少し恥ずかしくなる。あからさまに喜びすぎた。隣から聞こえた「うるさっ……」という小言は無視しておく。

「今から暇だったら部室に来て欲しいな」

私たちに優しい笑顔を向けた先輩は「それだけだから」とだけ言い残して、どこかへ行ってしまった。一体いつからいたのだろう。私としたことが、全く気が付かなかった。

「登場が急すぎんだろ」

何やら不満げなコウに、それがいいのと反論しておく。自由な人である先輩は、こうして急に現れる。儂くて綺麗。それでもつて変わった人。それが素敵なのに、コウには先輩の魅力がわからないようだ。

「てことで私は大切な用事ができましたので」

早く先輩に会いたい。その一心で、机の上のカバンを取って教室を飛び出した。コウが何やら騒いでいる。またいつのも小言だろうと気にしないでおいた。

階段を下った一階の突き当りに、私と先輩の二人だけが所属している文芸部の部室がある。

部室といっても使われなくなった教室の半分を使っただけの小さなものだ。

古い教室のせいか建付けの悪くなっているドアを開ける。使われなかった備品がごちゃごちゃと置かれた中、部室の窓際を背に向かい合う机と椅子が二つ。その窓側が私の席なのだが、空っぽの反対側。

「あれ、誰もいない」

先に部室にいると思っつたのに。先輩はまだ来ていないようだ。壊さないようにそつとドアを閉め、席に向かいながら先輩の行き先を考える。屋上、三年生の教室、中庭……そこまで考えるのをやめた。候補が多すぎる。放浪癖のある先輩の行き先を読むなんて不可能に近い。こういう時は待つに限る。

自分の机へカバンを下ろすと、目に入った空っぽの向かい側の席。待つと決めてもやはり感じてしまう寂しさ。誤魔化したくて背後のカーテンと窓を開けた。閉め切られていた室内に入ってきた乾いた風が心地良い。入道雲と昼より強い日差しが夏を思わせる天気。今日は本当に暑い。夏には負けるが五月だとは思えない。

廊下から誰かの話し声がする。先輩かもしれない。そう思っつて磨りガラスを見ても、人影がこちらに来ることは無かつた。

「ですよねえ……」

思わず声が漏れる。それもそのはずだ。もう半分の教室に用事がある生徒は少ないし、この部室に用事がある生徒は私たちだけと言っても過言ではない。話し声もいつの間にか消えていた。

ふと、ドアの近くに立て掛けてあるホコリを被った姿見が目に入った。近づいてみたら分かるのだが、鏡にヒビが入ってしまったっている。

「私は君が羨ましいよ」

姿見の枠にそっと触れながら出たのは独り言。この姿見は、先輩にとって大切な思い出の品だ。どうやら例のあの先輩が、作品のためだと学校の廃品置き場から持ってきたものらしい。他の備品もあの先輩が持ってきたものがほとんどで、軽い倉庫状態になっているのはそのせいだ。

そのためか、もう半分が使われている教材室と間違えう新入生が多いらしい。私もその一人。そこで先輩と作品に一目惚れして入部を決意したので、結果オーライというやつだ。

席に戻ってカバンから本を取り出し、机に置く。この席はもともとあの先輩が使っていたものだ。そうなれば、あの先輩もこうして本を読んでいたのだろうか。

「あーあ。私もあの人になれたらなあ」

私はあの先輩のことを全く知らない。先輩にどんな人だったか一度だけ聞いたことがあるが、「変わってたけど素敵な人だったよ」と寂しそうな表情で返された。それ以降聞けないでいる。つまり、結局何もわからなかったということ。だらりと椅子にもたれかかっている今の私と同じことをしている人だったかどうか。

再び視界に入ったのは割れた姿見。それに反射した強い光が、偶然にも私を襲った。

「いっ……!!」

光の強さに思わず目を瞑る。視界が白い。目が眩むとはこのことなのか。

視界が戻ってきた感覚がして、ゆっくりと目を開ける。何回か瞬きを試してみてもおかしなところはしない。失明などはしていないようだ。

安心したのもつかの間、机に本がない。落としたのだろうか。かがんで下を見ても何も無い。あるのは足元のカバンだけだ。好きな作家さんの本だからなくしたくなかったのに。少し残念だが、こういったのはいざ出でくる。今は諦めて起き上がると、また姿見と目が合った。

しかし何かがおかしい。よく見ると鏡の部分を隠すためか中途半端に布が掛かっていた。この一瞬で誰が？ 本もないしもしかして不審者？ よからぬ予想ばかりしてしまう。もしかして先輩がなんて考えてみても、正面の席は変わらず空っぽ。先輩が来た痕跡すらない。

誰かの足音が聞こえた。階段あたりだろうか、かなり近い。先ほどの予想が当たっているならもしかして。パニックになった私はとっさに目を瞑った。

「もう来てたんだ」

扉の開く音とともにしたのは聞き覚えのある声。目を開けると先輩が立っていた。机の上にある本、割れている正面の姿見。まるで何事もなかったかのようだ。あれは一体何だったのだろうか。一瞬考えたが、先輩と会えた安堵感には勝てなかった。

*
*

栗色の前髪の間隙から覗く伏し目になった瞳が、文字を追っている。

昼休みになってすぐ、屋上でいつものようにフェンスにもたれかかっていた先輩をとっ捕まえ、部室へ押し込んだ。

不可思議な現象以外に変わったことは起きず、ただいつものように先輩と作品の話をしただけだった昨日。結局、あの現象は一瞬の出来事ではなかった。幻覚か現実かどうかもわからない。何か意味があるものなのかもわからないし、もしそうだとしても心当たりがない。下校中の電車内、頭の中は不可思議な現象でいっぱいだった。

これは作品を書けという暗示なのか。そう思った私は、帰宅してすぐに一つの作品を執筆した。あの不可思議な現象を元にした現代ファンタジー小説。二千字にも満たない短いものだったが、誰かに見て欲しい衝動に駆られたのだ。

儂さのあるいつもの先輩の影を残しながらも、力強い美しさを感じる姿。ずっと見ていたい。このままこの静かな時間が終わらなければいいのに。

いくら願っても無慈悲にも時間は過ぎ去るもので。読み終わったららしい先輩が顔を上げる。その表情は雲がかかったような何とも言えないものだった。

何も言わない先輩の言葉を、固唾を飲んで待つ。何も言わないのではなく、何も言えないが正しい。本は好きだが、今まで書き手に回ったことはない未経験者。上手く書けないのはわかっている。対して先輩は中学時代から執筆を続けており、全国へ行くほどの実力がある。

先輩が何も言えないということは、そんなに酷いものだっただろうか。永遠を求めているものが、今はただ不安に感じてしまう。

「そうだね」

「ど、どうですか？」

「いいんじゃないかな」

先輩は穏やかな笑みを浮かべていた。不安だった心がスツと軽くなる安心感に身を任せ、目を瞑った。たった一瞬だけだったはずなのに、縫い付けられたように目が開かない。昨日の出来事が頭をよぎる。これも不可思議な現象の一つなのか。

「……んばい」

暗い視界の中で、声が聞こえる。間違いなく先輩の声だ。

「先輩、どうしたんですか？ 心ここに在らずって感じでしたよ」

ゆつくりと目を開けると、やはり先輩がいた。だが、おかしい。周りには私と先輩しかいない。『先輩』と呼ばれているのは、後輩の私からしたらおかしい状況だ。今の自分が自分ではないことはすぐに理解できた。肝心の誰かはわからないが。

「いや、なんでもない……よ？」

自分の喉から出る聞き慣れない声に違和感を覚えつつ、できるだけ自然に答えた。

先輩は一瞬眉をひそめたが、すぐにスマホへ目を向けた。その隙に先輩を見つめる。真新しい制服、今ほど長くない前髪。なんといっても、先輩の髪が瞳と同じぐらい真っ黒だった。先輩が栗色になったのは一年生の冬だと言っていた。つまり今はそれ以前。

「そういえば前言った新譜、よかったら、一緒に見に行きませんか？俺週末空いてますし」

意気揚々と話す先輩の真っ黒の瞳は、私が見た中で一番輝いていた。

それだけでわかった。今の私の正体が。そもそもこの部屋に二人だけにいるということは、その人しかない。

声を出そうにも喉が締まって声にならない。やはりこれは不可思議な現象だ。そう思ったと同時に、視界が白く染まった。

「立花さん、聞いてた？」

「え？」

口から出たのは自分の声。さっきまで別人の声だったのに。まるで別の世界から戻ってきたような感覚に戸惑ってしまう。

「大丈夫？」

先輩は椅子から立ち上がって身を乗り出した。急に近くなった距離と鼻を抜ける柑橘系の香り。どっと鼓動が高鳴る。とっさに出た「何の話でしたっけ」は、それに気づかれなくなかったからだ。

「いや、立花さんって卒業した先輩の作品読んだことあったかって思って」

椅子に座り直して言ったその言葉は、私を貫くには十分すぎるものだった。卒業した先輩、すなわちあの先輩のこと。

あの先輩は、全国大会常連だったそうだ。先輩よりも数々の賞を取っていたから、この文芸部は二人だけでも成立していたという。そんな人の作品はぎっと素晴らしいものなのだろう。先輩にも是非読んでほしいと言われていた。

それでも私は読む気になれない。先輩の瞳を掴んで離さないような人だ。そんな人に勝てるはずがない。だから読みたくない。それが私の本心だった。抱くであろう劣等感から逃げたいという我儘で幼稚な考えだ。

「立花さん？」

「あ、えっと……ないですね」

どうにかしないと。そう思って絞り出した言葉はなんだか不自然で。不安になって正面を見

る。

「ならいいや。困らせちゃってごめんね」

先輩の瞳はいつもと変わらず綺麗だった。なのに、どこか霞んでいるような気がした。

静かだった部室に、昼休み終了の予鈴が響く。長居しすぎてしまった。次の授業まであと五分しかない。

「行っておいで」

「先輩、またサボるんですか？」

椅子から立ち上がった私に、先輩は「まあね」とどこが誇らしげだった。もっと一緒に居たいが、あいにく五時間目の授業は数学だ。休むと次回に響く。先輩に便乗してサボれない。

「金曜のこの時間にサボる馬鹿は見捨てて早く行きなされ、少女よ」

部室に居座る気満々の先輩に見送られながら、急いで部室を出る。廊下を早歩きで進み、階段を駆け下りた。

教室の後ろのドアにたどり着いたのは授業開始三分前。何とか間に合ったようだ。教室内の騒がしさからして、先生もまだ来ていない。

安心してドアを開けると、私の席に男子生徒が座っていた。

「遅い」

せっかくの安心感をすべ吹き飛ばしたのは、聞き覚えしかない声。また遠いところからご苦労している幼馴染だ。

「私の席占領しないでもらえる？」

「友達と駄弁ってたんだから仕方ねえだろ」

コウが顎で指す先には男女の集団が。言ってしまうえば負けたような気がしたので、この人気者めという言葉は飲み込んでおいた。

「それよりお前に聞きたいことあったんだよ」

「何よ」

「お前って……」

コウが口を開いた瞬間に、授業開始を知らせるチャイムが鳴った。コウが話していたという男女の集団が、自分の席へ散っていく。

「やべっ」

コウも慌てて自分の席へと戻っていった。端の席だから大変だろうなと思いつつながら、空いた自分の席に座る。途中で椅子につまずいて転びそうになっている姿は滑稽だった。

コウが座ったのと同時に先生が入ってきて、すぐに授業が始まる。

「えーこの公式は……」

なのに、今日は先生の話がなかなか頭に入らない。自分が思った以上に不可思議な現象が気になっていったようだ。

今日でわかったのは、現象が起きた時に私はあの先輩になっっていること。先輩の姿からして数年前。あれは夢の一種なのか。でも昨日の夜は普通に寝た。特に何も変わったところはなかった。

そして、先輩に関連した事柄の時に現象が起きているということ。回数制限や、詳しくこういう時に起きるといのはまだわからない。

とにかく今はわからないことだらけだ。考えても仕方がないのかもしれない。そう言い聞かせても、失ってしまった集中力を取り戻すのは難しい。

諦めた私は机に伏せて窓の外を見る。青空に浮かぶ大きな入道雲が太陽を隠していた。これだけ見れば夏と勘違いしてしまう空模様。昨日も暑かったが今日は別の暑さがある。日が差せば昨日のように暑くなるのだろうか。

雲が風に流され、徐々に現れた太陽。その光が直接目の中に入った。

とっさに目を瞑る。白く染まった視界は、眩しいを通り越して痛いまでである。

「すみません教室まで来てもらっちゃって」

聞き覚えのある声は、教室に入るときに聞いたものとはまた違う。

ゆっくりと目を開けると前の席に黒髪の先輩の背中が。私が座っているのは一番後ろの席。授業が行われていたはずの教室には、私と先輩の二人以外誰もいない。先輩が教科書類をカバンにしまっているところを見るに、放課後だろうか。

窓の外を見ると、夏のような暑さも入道雲はない。代わりにあるのは春らしい暖かさと茜色の鱗雲。

それだけで確信を持つことができた。これは不可思議な現象だ。どうやら一日に一回だけという決まりはないようだ。

「先輩……？」

「いや、何でもないでもない」

こちらを振り返った先輩に見つめられ、すぐに目を逸らした。自分を見られているわけではないのに、どうしても恥ずかしくなってしまう。

「そうそう、今日ずっと楽しみだったんすよ。この間の作品の続き見れるんで」

それはこの上ない嬉しさの見える表情と声色だった。私の前では見せないであろう先輩の姿に、ぐっと胸が締め付けられる。一生懸命絞りだした「そうだね」は震えていなかっただろうか。

「太陽の光の反射見て過去に戻るってどんなもの食べてたら思いつくんですか。しかもそれが本当に過去に戻るんじゃないかって追体験っていうのが俺は好きですね」

頭を殴られたような衝撃だった。作品を見たことあるか。先輩がそう言った理由。それはこれだったのか。

教室に入ってきた陽の光。その先にあったのは眩しい夕日だった。また視界が白く染まって

いった。

「……ちばな」

誰かが呼ぶ声が聞こえて目を開ける。ぼんやりとした視界に夏のような空が映る。

「立花！」

「は、はい！」

勢いのある声につられて反射的に返事をした。教卓の方向を見ると、先生がこちらを見ていた。

どうやら私は寝ていることになっていたようだ。先生は「お前が寝るなんて珍しいな」と言うだけで、何事もなかったかのように授業が再開された。特に注意もされなかったのは、普段優等生をしているからなのだろうか。

教室を見渡しても、先輩もあの先輩もない。声も姿も自分だ。もし、過去に戻っているとしたら。あれは先輩たちの思い出なのだろうか。現象とあの先輩の書いた作品と関係はあるのだろうか。結局その授業の内容は、全く入ってこなかった。

『海に行きたいから一緒に行かない？』

それは突然の連絡だった。日曜日の昼下がり。最近の暑さと比べると過ごしやすい気温の今日は、どこか出かけるには最適な天気。そんな日に来た先輩からのお誘い。何もすることがなかった私に、断るといふ選択肢はなかった。

急いで用意をし、最寄り駅で電車に乗る。待ち合わせ先は学校近くの駅。車窓から眺める景色は、いつもと通学と何ら変わらない。それでも違う景色に見えたのは、心のときめきからだった。

単純に誘ってもらえたのが嬉しかった。先輩にという点もそうだが、家にいても不可思議な現象について考えてしまう。

あの先輩になりたい。その願いが叶えられたとしても、あのような形は少し違う。現象が起こるたびに現実を突きつけられているようで苦しい。一人きりだと頭に浮かぶのはそんなことばかり。これで昨日は一日潰れている。

駅前先輩と合流し、海へ向かう。海といっても学校からすぐの港で、小さな公園と遊歩道があるだけだ。それでも先輩にとってはお気に入りの場所で、散歩がてらによく行くらしい。

「海っていいよね」

「ですね」

昼休みの屋上でするように、フェンスに寄りかかって景色を眺める。目の前に広がるのはいつもの騒がしいくらい色とりどりの景色ではなく、どこまでも続く青色のコントラスト。

隣に居るのは私服の先輩。潮風に揺られる横顔は、私の語彙力では綺麗以外の言葉で表すことができそうにない。

「海は生命の源だって話は知ってる？」

「すべての生命は海で生まれたって話でしたっけ」

確か『地球最古の生物が生まれたのは海』というところから来た話だった気がする。生物学に詳しくない私でも知っている有名な話だ。

「本来はね」

小さく呟いた先輩の瞳は、真っ直ぐに水平線を捕えている。

「海が生命の源なら、海に行けばもういない人にも会えるって思うんだよね」

先輩の顔は、金曜の授業中に見た空のように曇っていた。深く聞くべきではない。感じ取ったのはそんな気配。

自分で思っているより険しい顔をしていたのだろうか。私の顔を見た先輩は「ただの妄想だよ」と小さく笑った。その笑顔の不自然さが気になったが、触れていいものか迷って何も言えなかった。

そのあとはいつもと変わらず他愛のない話をしながら、海を眺めていた。学校以外の場所ですぐして先輩と話することができる。それだけでも私にとっては幸せな時間ではない。

「公園の方行かない？」

遠回しに立ちっぱなしで疲れたと言いたいのだろうか先輩の提案で、公園へと向かう。いつもか並んだベンチのうちの一番端に私は座る。先輩もすぐ座ると思っていたのに、落ち着かない様子で立ったままだった。

「先輩は座らないんですか？」

「えっ、ああ……飲み物買ってくるけど何がいい？」

バツが悪そうに目を泳がせた先輩。一旦この場から離れたと言わんばかりの姿に、何かあったのだろうかと気になる。公園まで来たのは先輩の提案なのに。

「そんな、私は大丈夫です」

「急に連れてきたわけだし奢らせて？」

先輩は、遠慮はいらぬからと優しく微笑んだ。風に乗ってふわりと香る柑橘系の香りも相まって、どうしても頬が熱くなる。誤魔化したくて言った「じゃあお願いします」は少し早口だったかもしれない。

「何がいい？」

「あ、先輩と同じやつでいいです」

何気ない一言だったつもりが、先輩は驚いたような顔をした。そんなに人に判断を委ねるタイプに見えないだろうか。困惑する私に「わかった。ちょっと待っててね」と声をかけて自動販売機に向かう先輩の後ろ姿は、少し悲しそうに見えた。

「……変なの」

先輩が変わっているのはいつものこと。いつものことなのだが、今日はなんだかおかしい。毎日のように不可思議な現象に苛まれている私が言えたことではないが。そういえば、先輩といるのに今日は不可思議な現象が起きていない。学校限定なのだろうか。しまった。また不可思議な現象について考えてしまっていた。気を抜くところだ。

自動販売機は少し離れたところにある。先輩が戻ってくるまで海の声でも聞いておこうと思いい、目を瞑る。カモメの鳴き声、潮の香り、波の音。誰の声も聞こえない静かな時間。これが味わえるから海が好きだ。

「なんでそんな大事なこと言ってくれなかったんですか……」

静かなはずの時間を遮ったのは先輩の声。またか。さっきまでの時間は束の間の休息だったようだ。

目を開けて隣の先輩を横目で見る。先輩の服装は今日と同じで、現在の出来事と錯覚してしまいそうになる。

「余命って……そんなの……」

二人の間には汗をかいたミルクティーのペットボトルが二つと、数々の書類。入院案内、薬の説明文書、そして診断書。その他の書類に隠れて肝心の病名は見えない。

もういない人。それがあの先輩だったのなら。頭をよぎる考えを、妄想だと言い聞かせた。そうでないと泣いてしまうような気がしたから。

「治療する気もないんですよね」

応えようにも喉が締まったかのように声が出ない。つまりあの先輩はこの時何も言わなかったのだろう。

「わかりました。無言は肯定ですもんね」

そう言った先輩の声は震えていた。

改めて先輩の方を見る。表情は前髪とその影に隠れて見えない。それでも伝わるのは、溢れ出す感情を出さないように耐えているということ。

「そうですね」

顔を上げた先輩の黒い前髪の間で揺れる瞳が、私であって私ではないものと合う。

「せめて先輩が卒業するまででいいです。あなたの後輩として隣に居させてください……」

先輩の頬を伝う水滴は、まるで宝石のように陽の光を反射していた。その光がなぜか眩しくて、目を瞑った。

「立花さん」

また、先輩の声が聞こえた。今度は横ではなく正面から。

「もしかして最近疲れてる？」

目を開けると、正面の先輩の手にはミルクティーのペットボトルが二本。見覚えのあるもの

にどうしても胸が苦しくなるのは、さっき起きた現象のせいだ。

「ぼおっとしてること多いからリフレッシュできてないのかなって思ってたんだけど……逆に疲れさせちゃったよね。急に連れ出してごめんね」

眉を下げる先輩を見て、とっさに出た言葉は「ちょっと寝れてないのかもしれないってだけです」という誤魔化しだった。

「そっか。若いんだからちゃんと寝なよ？」

「はい。気をつけますね」

本当のことを言ってもよかったのに、私は言わなかった。あの先輩の作品を知っている先輩なら何かわかるはずだ。なぜだろうか、言わなかったのは。片方のミルクティーを受け取りながらそんなことを考えていた。

「もう帰ろうか」

「いいんですか？」

「今なら詰まっていた部分が書けそうな気がする」

すっかりインスピレーションが湧いたらしい先輩は、わざわざ駅まで送ってくれた。私が心配だからとは言わなかったが、別れ際にこちらを気にする様子を見てしまえば何となくわかった。それでも、これは後輩としての心配だ。あの先輩に向けたものとは明らかに違う。

駅のホームのベンチに座って電車を待つ。特急電車が通過しますというアナウンスと共に電車が通り、強い風が吹いた。

電車の騒音で周りの音が聞こえなくなる。まるで一人きりになったような気分だ。

「先輩はこれからどうしたいんですか」

電車が過ぎ去って聞こえた声。隣に座っていたのは黒髪に今日と同じ服装の先輩。これは海から帰る途中の記憶だろうか。

「どうもしないよ。死ぬまでこのままの日常を過ごすだけ」

口を開いたら自然と出てきた言葉。きつとあの先輩もこう言ったのだろう。自分のことのように悲しくなった。あの先輩はもっと悲しかったのだろうか。

二人の間に流れる沈黙。時間にしては数分だろうが、もっと長いもののようにも思えた。

「先輩」

沈黙を破ったのは、線路側を見つめたままの先輩だった。今より少し幼い横顔から決心の色が見える。

まもなく電車が参ります。黄色い線までお下がりください。アナウンスとともに入ってきた電車。

「また海行きましょう」

立ち上がった先輩の先。電車の窓に映っていたのは、白いワンピースに麦藁帽のショートカットの少女。絵に描いたような美人だった。そのうえ、重い病気で余命宣告がある。それがあ

の先輩の正体だった。

「……こんな勝てっこないよ」

溢れるように出た言葉は、あの先輩ではない。私としてのものだ。

その言葉は誰にも届くことはなく、電車の発車を知らせるアナウンスにかき消された。

「先輩、行きましょ」

腕を掴んだのは先輩の大きな手。でもこの白い肌は私のものではない。これが私のものだったらどれだけ嬉しいものだろうか。沈んでいく気持ちとともに、視界が暗くなった。

「おい立花！」

誰かに声をかけられた。誰だろうか。この声は何年も聞いている気がする。

「玲^{れい}！」

それは懐かしい呼び名だった。小さい頃、コウは私をそう呼んでいた。中学を境に名字呼びするようになってしまい、距離ができたようで悲しかった記憶がある。そうか、この声は。

「おいこんなとこで寝てないで起きろ！」

学校指定の練習着で私の前にかがんでいる好青年。やっぱりコウだ。俯き気味だったから寝ているように見えたのだろう。駅のホームの時計を見る。駅に着いて十数分。先輩と別れてそんなに経っていない。

何でここに？　と言う前にコウは「部活終わりだったの」と答えた。そういえば、県大会の練習で土日も学校にいると言っていたのを思い出す。

「お前最近寝れてねえの？」

あの現象のせいで眠ったと勘違いされることや上の空になることが多くなったが、そんなにかというのが素直な感想だった。今まで先輩とコウぐらいにしか指摘されていない。先輩は単純に一緒に居る機会が多いため納得がいく。

だが、友達にもされたことがない指摘をコウがするのか。女除けのためだとか偶然一緒の時間になったからだとかで一緒に帰ることはあるが、最近はお互いに部活の毎日だ。もちろん、不可思議な現象について一切伝えていない。妙だ。

「なんでコウが心配するのよ」

何気なく聞いたことだった。いつものように無駄絡みの一環ならそう言えばいいのに。

何やら違うらしいコウは、険しい顔をしながら短髪を雑に掻きむしったあと、小さく舌打ちをした。

「心配するに決まってるんだろ！　何年も好きなやつのことぐらい心配させろよ！」

「いま……なんて……？」

「好きなやつのことぐらい心配させろって言った」

聞き間違えたわけではなかった。幼馴染からの突然の告白。私は驚きを隠せなかった。

私が先輩のことを好きのように、コウは私のことが好き。もちろんコウのことはなんやかんや言いつつそれなりに好きだ。でもその好きは、また違う。

こういう時はなんといえがいいのだろうか。迷っている私に、コウは「今から言うのは俺の独り言だ。お前はこれ以上何も言うな」と、意を決したように語りだした。

「お前にずつと片思いつてやつしててき。うだうだしてたら高校生になっちまったし、そろそろ覚悟決めねえとって思ってたら……お前はお前で好きなやつできたみたいだし」

息が詰まる。コウは全部わかっていたのだ。わかっている私に想いを告げた。その理由も、長年一緒に居るからわかる。自分の気持ちにケリをつけるためだ。

「俺は敵わねえよ。アイツには」

私はその言葉を否定できなかった。コウは幼馴染。家族同然だ。それ以上でもそれ以下でもない。対して先輩は私にとって憧れの人であり大好きな人で、代わりはいない。コウにとって私はそれと同じようなものだろう。

恋とは残酷なものだ。想えば思うほど、列車のように簡単に乗り換えることはできない。改札を抜けるか、そのまま待ち続けることしかできない。

「だからお前も後悔すんなよ。もし後悔させるようなヤツだったら俺が許さねえ」

真っ直ぐな眼差しは、何年も一緒に居る中で初めて見るものだった。

コウは改札を抜けた。なら私はどうするのか？ いつまでも中途半端な場所にいるつもりなのか？ そう問われている気がした。まだ答えは出ないと思う。それでもいつか出さないといいけない。

「そういうことだから」

すぐに目を逸らしたコウ。照れくさくなったのだろう。最後まで素直じゃないやつだ。

「なんであんたが許さないのよ」

「うるせえカッコつけさせろ」

そう言い放つコウの態度は、今さっき振られたばかりとは思えない。吹っ切れすぎにも程がある。

なんだかおかしくて、吹き出すように笑った。つられてコウも笑っていた。

私たちはいつもの幼馴染の空気に戻っていた。

昼休みを告げるチャイムが鳴り響く。今日もまた、屋上への階段を駆け上がる。もちろん、先輩に会いに行くために。

今日は比較的過ごしやすい気温だから、きつと先輩は学ランを着ているのだろう。気温が上がってくると長袖のカッターシャツを着ているが、私は学ランのほうが好きだ。

そういえば、先輩はお昼を食べていない。毎回私だけ食べている。今度先輩の分も作って一緒にランチというのでもいいかもしれない。

そんな妄想をしないと、不安に押し潰されそうだった。

連日起こる不可思議な現象。先輩たちの記憶を追っていくたび突き付けられる現実に、無理だ。諦める。遠回しに言われているようで不安になってしまう。

三階の踊り場に差し掛かったころ、スマホの通知音が鳴る。

「この忙しいときに誰よもう！」

文句を言ってやろうと通知欄を確認すると、そこには笹木先輩の四文字があった。予想外の相手に嬉しくなって、急いでメッセージアプリを開いた。

『屋上にはいないから』

さっきまでの気持ちは一変し、頭の中が真っ白になった。

先輩は元々自由な人だ。今まで同じ場所にいたのが珍しかった。

静かにスマホを閉じ、再び階段を上っていく。足枷か何かがついたように、足取りが重い。それでも屋上に向かってるのは、呪いの類なのだろうか。

屋上の扉の前、こんなに高揚感がないのは初めてだった。うまく力が入らなかったからなのか、屋上の扉はいつも重く感じた。

扉の先の青空は、腹が立つほど綺麗な春の空だった。綺麗なのに、足りない。フェンスにもたれかかる先輩がいないから。

「先輩……」

フェンスの向かい側にポツンと置かれたベンチに座る。私があ先輩だったら、こんな思いにならなくて済んだのだろうか。それでも変わらないのか。私にとっての先輩のように、先輩にとっては唯一無二の人だ。代わりが居ないことなんてわかってる。だからせめてあの瞳に映ることができたら。不可思議な現象が起こるたび、悩みは増えていく。

「どうしたら見てもらえるんだろう」

誰もいない屋上だと、答えが返ってくることはない。

現実から目を背けるように目を閉じた。

「もう卒業ですね」

先輩の声と共に、まだ冷たさの残る風が肌を撫でた。

目を開けると、学ランを着た先輩が隣に座っていた。駅のホームでの現象よりも伸びている黒い前髪。かなり時間が飛んでいることがわかる。卒業というワードからして、学期末だろうか。

「卒業は永遠の別れじゃないですもんね」

そうだと欲して欲しい。先輩はそう言いたかったのだろう。

人は生きていなければ会う事は出来ない。海や駅、学校に行っても会えたような気がするだ

けだ。ただ思い出をなぞなっているだけ。グツと胸が締めつけられる。何もできない自分がやせない。もしかしたら、あの先輩本人も同じような気持ちだったのかもしれない。

「書きたいものは全部書いたって言ってましたよね」

それだけ言って先輩は黙ってしまった。この先を言ってしまえば、溢れて止まらなくなる。それでいいのか迷っている。そんな葛藤が見えた。

「こんな薄いじゃなくて……分厚い一冊の本がいいんですよ……俺は……」

途切れ途切れの言葉を繋げながら話す先輩の頬に雫が伝う。落ちた先に握られていたのは一枚の白い封筒だった。

「俺がまだ……見足りないんですよ……」

まだ伝えられてないことがある。その言葉が、潤んだ瞳に映っている。

私だって先輩に伝えたいことがありますよ。言いたくても声が出ない。

急な眩暈に襲われて、視界が黒く染まった。

「立花さん」

暗い視界の中、誰かの声が聞こえる。不可思議な現象の中で何回も聞いた声。その声が呼んだのは、私のものだった。

「おはよう。今日は暖かいね」

ゆっくりと目を開けると、目の前にはしゃがみこんだ学ランの男子生徒。私の憧れで大好きな、今一番会いたい人だ。

「……おはようございます。今日は来ないと思ってました」

「担任に呼ばれてたってだけで、今日来ないとは言ってないよ」

立ち上がった先輩が、隣に座る。ふんわりと香る柑橘系の匂いに安心感を覚えた。

先輩の横顔は相変わらず綺麗で、青空によく映える。あの先輩は、この横顔にどんな感情を抱いたのだろうか。私と同じだったのかもしれない。そうなれば私に勝ち目はない。

後悔するな。昨日の出来事が頭をよぎる。このままでいいのか。いいわけがない。そうだな。私の中で決意が固まった。

「先輩、先輩にとって私ってどんな存在ですか？」

先輩は「突然だね」と笑った。春の暖かい太陽の光を受けて光る先輩の瞳。そこに私は映っているのだろうか。

「俺みたいなどしようもないやつと話してくれる優しい後輩かな」

そう言って私を見る瞳は、やはり私を映していない。近いようでもつと先。そんな不思議な場所を見ている。

「先輩」

「どうした？」

「私は先輩のこと、世界一大好きな人だと思っています」

溢れそうな気持ちと伝えたい思い。先輩を困らせてしまうかもしれない。それでも言うべきだと思った。コウが私に想いを打ち明けてくれたように。伝えたいことが多すぎて、抑えたいつもりが私には無理だったようだ。

先輩は目を見開いて驚いていた。それもそのはず。先輩にとって私はただの後輩。そんな子から想いを伝えられたのだから。

「……ごめん」

「知ってます。先輩にとって私はただの後輩だってことも、私にとっての先輩のような人が先輩にもいることも」

先輩はまた驚いた顔をしたが、すぐに「なんだ、バレてたか」と笑った。穏やかな中に悲しさが見える。私はそんな顔が見たかったわけじゃないんです。言いたくても言葉が出ない。

「あの人は結局生きていられなかった。それでも俺はあの人のことを一生忘れないと思うし、忘れられないと思う。先輩が使ってた香水まで買ったし、もう忘れる気もないのかもね」

先輩の真っ黒な瞳の中に映る空色。それはただの青空ではなく、あの先輩の居る場所なのだろう。

「そうだ。渡したいものがあつたんだった」

学ランの内ポケットから先輩が取り出したのは、一つの封筒。それは見覚えのある白色で、既に封が開いていた。

「先輩からもらった手紙に入っていたのを思い出してね。もし女の子の後輩ができたら渡してほしいって言われてたんだよ」

私は手紙を受け取り、中身を見る。

『親愛なる後輩ちゃんへ』

綺麗な字で書かれた文字たち。あの先輩の作品もこの文字のように綺麗なものだったのだろうか。

内容はただただ先輩を支えてあげて欲しい、もし過去を辿るようなことがあつたら全てわかる、文芸部をお願いするといったものだった。

不思議な手紙なのに、腑に落ちた。不可思議な現象も、この思いも、全部納得がいったからだろう。

私はあの先輩にはなれないし、どう頑張ってもなれない。先輩とあの先輩。二人の思い出を見てきた私だ。

だからこそ、あの先輩になることは諦めようと思う。

「笹木玲雄先輩！」

今までで一番明るい声で先輩の名前を呼ぶ。

「卒業するまででいいのでこれからも変わらず隣に居させてくれませんか？」

せめて大事な後輩として、その瞳に映りこんでもいいだろうか？

そういった意味を込めたこの言葉は、きっと伝わっているはず。

「親愛なる後輩ちゃんへ

この手紙が渡る相手がいるかどうかはわからない。だが、もしもの為に書いておく。突然で申し訳ないが、私からお願ひがある。どうか笹木君を支えてあげて欲しい。

何のことかわからないかもしれない。それならただただ笹木君の隣に居てやってくれ。

もし、私の記憶を追憶するようなことがあれば、全てわかるだろう……と言っても完全なる妄想だ。世の中小説のように不可思議なことは起きっこない。私の怨念的な何かが起こせるなら話は別だが。

長くなってしまつてすまない。これだけが私の無念だ。後は任せたぞ。あと、文芸部に入部してくれて感謝している。部のこともよろしく願ひする。では。

「笹木君の先輩より愛をこめて」